

は短かく、斜上方に突出し、端部は丸い。底部は丸味があり、外面は2分の1～3分の2程篋削りしている。蓋は口縁部径10.9cm、高さ4.5cmで、身のいずれともセットを組むことができる。口縁端部は面を取っていて、尖り気味に終る。天井部との境界の稜は甘く、天井部は丸くふくらむ。直口壺は、口縁部が内側にカーブして開き、端部は丸く終る。口縁外面に2条の凸帯をめぐらせ、頸部までの間に2本の波状文による文様帯をつくっている。体部は最大径を中程にとり、やや扁平であるが球体に近くなっている。施文はなく、櫛状品によるカキ目状の調整痕がみられ、底部を篋削りしている。これらのうち、杯身、蓋は鉛練古墳や上ノ山7号墳等の出土品に近似した特徴を持つ。また、直口壺では、口縁端部が丸く終り、口縁部の施文がやや粗雑になり、体部の施文が省略されている。さらに、体部が球体に近くなっている等、黒田永山4号墳のものに比べて、やや退化した状況にある。

以上、知見に触れた範囲であるが、湖北地方内で8遺跡からの古式須恵器の出土を見ている。このうち、鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山・山津照神社の7古墳の出土品では、黒田永山4号墳、雲雀山2号墳が他よりやや古式といえよう。また、入江内湖遺跡出土品は鉛練古墳等に近く、難波遺跡出土品は、現在のところ、湖北地方で最古式のものと考えている。

ハ．湖北地方における後期群集墳の発生とその形成の諸段階

前項で明らかなように、湖北地方地において古式須恵器を出土する古墳は鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山古墳出土、山津照神社古墳の7古墳である。このうち、出土地の明瞭でない伝茶臼山古墳出土と出土品のセット関係で疑問の持たれる山津照神社古墳の2ヵ所を除くと、次のような共通点が見出せる。すなわち、

①上ノ山7号墳、黒田永山4号墳及び鉛練古墳は木棺直葬、雲雀山2号墳が「簡略化した最小限の構造」を持つ竪穴式石室、同3号墳が「区画としての側壁を作っただけの極めて簡単な」構造を持つものであり、いずれも横穴式石室を内部主体として持たない。

②鉛練古墳、上ノ山7号墳、黒田永山4号墳、雲雀山2号墳、同3号墳には共通して武具あるいは武器の副葬品が見られ、表3で明らかなように、横穴式石室墳で多く認められる馬具類の副葬がない。

③黒田永山4号墳、雲雀山2号墳及び鉛練古墳では、須恵器、土師器等土器類は、棺内ではなく、棺蓋上方等棺外に副葬されている。等の点である。湖北地方において、最古式と考えられる須恵器は難波遺跡のものである。須恵器が古墳に副葬されるのは、現在のところ、黒田永山4号墳あるいは雲雀山2号墳の段階であって、形式的には1～2形式下る。さらに、須恵器が横穴式石室に副葬されるのは、上ノ山7号墳等より1形式下る湖北町郡上四郷崎古墳からである。出土土器類のうち最古式のⅠ類は、たとえば杯身を見ると、口縁部径12.4cmと大型化しており、高杯にお

No.	古墳名	所在地	立地	内部主体	副葬品						
					須恵器	土師器	武器	武器	馬具	装身具	農工具・その他
1	黒田永山4号墳	余呉町坂口字永山	丘陵尾根	木棺直葬	壺	高杯	短甲	刀・剣 短剣・ 鏃・鉾			鉄斧
2	雲雀山2号墳	浅井町湯田	丘陵尾根	竪穴式石室	有蓋高身・ 杯蓋・埴	埴	短甲	刀・剣 刀子・ 鏃・鉾		勾玉・ 丸玉・ 小玉・ 三輪玉	変形獸文鏡・櫛・鎌
3	雲雀山3号墳	浅井町湯田	丘陵尾根	竪穴式石室	埴			剣・鏃			変形獸文鏡
4	鉛練古墳	余呉町中之郷字鉛練	丘腹	木棺直葬	杯身・有蓋・ 蓋高身・蓋型・ 大台・器臺・ 甕		短甲?	鏃			釘
5	上ノ山7号墳	余呉町坂口字上ノ山	丘端	木棺直葬	杯身・蓋			刀			
6	四郷崎古墳	湖北町郡上字四郷崎	丘端	横穴式石室	杯身・有蓋・ 蓋高身・無蓋・ 高杯・壺口・ 直口・提埴・ 壺瓶	壺		短刀		管玉	
7	中山古墳	長浜市小一条町中山	丘陵尾根	横穴式石室	杯身・有蓋・ 蓋高身・無蓋・ 高杯・提瓶・ 臑・広口壺・ 直口壺					ガラス小玉・金環・鉄環	紡錘車
8	黄牛塚古墳	近江町顔戸字黄牛塚	丘陵裾部	横穴式石室	杯身・有蓋・ 蓋高身・無蓋・ 高杯・平臑・ 直口壺・直口壺・ 付壺・横瓶	壺		刀子		勾玉	釘
9	上ノ山1号墳	余呉町坂口字上ノ山	丘端	横穴式石室	杯身・有蓋・ 蓋高身・無蓋・ 高杯・直口壺・ 埴・甕	甕			辻金具・帶金具		
10	諸頭山2号墳	長浜市小一条町諸頭山	丘陵裾部	横穴式石室	杯身・有蓋・ 蓋高身・無蓋・ 高杯・平瓶	甕				金環	釘・カスガイ
11	諸頭山3号墳	長浜市小一条町諸頭山	丘陵裾部	竪穴式小石室							

表3 湖北地方主要古墳一覽表

いても長脚化の傾向にある。石室は全長5m、玄室長2.3m、幅3.0m、羨道幅0.5mと横長の玄室の長辺に羨道が取り付くタイプで、現段階では、湖北地方における最古式の横穴式石室であって、上述の共通点①は、横穴式石室導入の前段階における主体部形式を示すものであろう。

共通点②については、内部主体の構造形式の変化とともに、そこに副葬されるもののセット関係の変化をも認められる点に注目すべきである。さらに、共通点③においては、副葬品たる須恵器等土器類に対する観念上の差異としてとらえることができる。

須恵器生産上の第1の画期として、「器形の変化のみでなく、須恵器の量産化を暗示する製作技術上の変化があらわれる^{②④}」とされる。須恵器の生産上の画期が単なる製作技術上の問題にとどまるものではなく、そこに、社会的な要請、あるいは、情勢の変化を認め得るものであるなら、上述のような、古式須恵器を出土する諸古墳と横穴式石室を導入した四郷崎古墳以降の諸古墳との墓制上の顕著な差異は、少なくとも、湖北地方における社会的な変化に呼應して生じたものであることを示すものであろう。従って、時代区分上ここに一つの画期があるものと考え、この画期を迎える社会的な変化について、古式須恵器を出土するものを含めた諸古墳群の分析を通じて追求してみたい。

まず、すでに調査が実施され、その内容が比較的明瞭なものに限って通覧しておく。

①上ノ山古墳群 7基の円墳より構成され、このうち1～3号墳とした3基は横穴式石室を持ち、6世紀後半から七世紀初当のものである。これに対し、7号墳は本棺直葬墳と考えられ、6世紀初当にまでさかのぼる。4～6号墳については不明である。

②黒田永山古墳群 10基の円墳から構成され、4号墳は5世紀末の木棺直葬墳である。他のものについても、いずれも木棺直葬墳である可能性が高い。

③雲雀山古墳群 8基よりなり、1～3号墳は5世紀末～6世紀初頭のもので、いずれも横穴式石室を採用していない。

④四郷崎古墳^{②⑤} 最古式の横穴式石室を持ち、単独で群を形成しない。副葬品の須恵器に3形式が認められ、6世紀前半～後半の間に、少なくとも3回にわたる埋葬が認められる。

⑤諸頭山古墳群^{②⑥} 3～4基の円墳から構成される古墳群である。2号墳は6世紀末～7世紀初頭の遺物を出した横穴式石室を持ち、3号墳は終末期の竪穴式小石室を持つ小円墳である。1号墳も横穴式石室を持っており、2号墳に近い年代が考えられる。4号墳は古墳であるか否か明瞭でない。

⑥近江町黄牛塚古墳^{②⑦} 横穴式石室を持つ6世紀後半の円墳である。四郷崎古墳と同様、単独墳である。

⑦米原町磯古墳群^{②⑧} すべて横穴式石室を持つ6基の円墳から構成されている。現在のところ、2号墳が最古式のもので、四郷崎古墳に続く形式差のある須恵器類が出土している。また、当古

墳群の出土品と伝えるものの中に、7世紀初頭まで下るものがあり、従って、当古墳群は、6世紀中頃～7世紀初頭までの間に形成されたものと考えられる。

以上の7例のうち、いわゆる後期群集墳とされるものは⑤諸頭山古墳群、⑦磯古墳群である。その形成初期の年代に差異を見るが、湖北地方における多くの横穴式石室墳は、このどちらかに相当する。

④四郷崎古墳、⑥黄牛塚古墳は横穴式石室を持ちながら群を形成しないものである。湖北地方には、余呉町大門古墳、長浜市布勢古墳等比較的多くの単独墳が認められるが、本来群を形成していたものが、1基を残して消滅してしまったものである可能性もある。ただ、黄牛塚・四郷崎両古墳は、周辺地形からして、本来1基単独であったようである。

①上ノ山古墳群は木棺直葬墳と横穴式石室墳が併存するもので、6世紀後半に至って、⑤、⑦例同様、後期群集墳的様相を示すものである。この類例としては、湖東地方ではあるが、安土町竜石山古墳群^⑩がある。当古墳群は山丘上に5基より構成されるもので、その全容が明らかにされている。1号墳は墳頂に2棺が直葬され、5世紀中頃に比定されている。2号・4号・5号墳は横口式石室と呼んでおり、3号墳のみ両裾式の横穴式石室を持つといわれる。2号墳がやや古く、3～4号墳がほぼ同時期（海北塚期）とされている。すなわち、6世紀後半に至って、いわゆる群集墳的性格の段階に入る古墳である。

- このような古墳群の有り方から、これらを次のようにまとめることができよう。すなわち、
- ①横穴式石室の採用に至るまでに群の形成を終るもの。
 - ②横穴式石室の採用前に群の形成が始まっており、石室採用以降においても群の形成を継続するもの。
 - ③横穴式石室の採用とともに群を形成するもの。

この3通りが考えられよう。このうち③の有り方は、畿内中枢部においても、遅速の差はあるが、一般的な群集墳である。一方①、②の有り方については、大和盆地北部、河内、摂津地方等畿内中枢部では、群集墳の発生が5世紀代にさかのぼる例はないとされる^⑪。①のタイプを示すものとしては、播磨三木市別所町高木古墳群がある。当古墳群は径20～30mの円墳4基、径10m前後の小円墳27基が群集しており、調査されたものは、すべて、一墳一葬の木棺直葬墓であり、3分の1の古墳から出土した須恵器類は5世紀末から6世紀前半のものが占めているといわれる。②のタイプには橿原市新沢千塚古墳群があり、ここでは、5世紀代の木棺直葬墳が群の内部に含まれている。また、加古川市西条古墳群は、三支群に分かれ、南・北の両支群が横穴式石室を主体とするのに対し、中央の支群には木棺直葬が多く、出土須恵器により、5世紀末にさかのぼるものがあるといわれる。このように、採磨平野や大和盆地南辺で、畿内の他の地域に先がけて群集墳の発生していることが、すでに、指摘されているのであるが、湖北地方においても、群集墳の

発生を5世紀末までさかのぼらせる必要がある。さて、群集墳の発生が、5世紀段階において生じた共同体内部での首長の規制力の弱体化と、共同体を構成する家族の成長により、有力家族が墓を営みはじめることによるとされるなら、上記の3通りの有り方は、およそ次のように説明されるであろう。すなわち、①は、より早く成長した有力家族墓であるが、いわゆる群集墳の最盛期にはその勢力を衰退させていったものの墳墓群、②は①と同様の有力家族墓であるが、群集墳最盛期に至って、なおかつ、社会情勢に対応しつつ成長を続けた家族のものの墳墓群、③は、群集墳最盛期に至って、新たに成長した家族の墳墓群と仮定することができよう。

このような群集墳発生及び形成の諸段階が上記のように説明し得るならば、群集墳を形成した家族の盛衰の起因は何であろうか。特に各段階のものが分布する余呉町内の谷合部を中心にみてみたい。

余呉町内、すなわち、北国街道沿いには、北より、今市に2基、中之郷に3基、下余呉に2基、坂口に3群と1基が知れている。中之郷の3基中1基は笠上遺跡で検出された4世紀代にさかのぼるかと考えられた土壇墓であり、その性格が明瞭ではないので除外する。上記①の段階のものとしては、中之郷鉛練古墳、坂口黒田永山古墳群であり、②は坂口上ノ山古墳群である。他はすべて③の段階の群集墳である。これらはいずれも径15m前後の小円墳であり、いわゆる首長系列に属すると考えられる前方後円墳や大型円墳は含まれない。湖北地方、特に伊香郡内において見た場合、首長墓と考えられる前方後円墳は、高月町古保利古墳群^{③②}、同町涌出山古墳群、同町物部古墳群と高月町の西半部に集中して認められる。これらの性格については、かつて若干触れてみたことがある^{③③}。すなわち、伊香郡が地名考証よりして物部氏と関連すると考えられ、郡内に、「東物部」、「西物部」等の地名が存在すること、また、「東阿閉」、「西阿閉」の地名も存在し、西阿閉の集落内に「安曇」を冠する橋名が見えること等により、当地が和名類聚抄に見る「安曇郷」に当たると考えられる事等からして、伊香郡の地が物部氏との関連において考えられてきた。物部氏については、日本書記において政治的変動期たる応神、仁徳両朝にその姿が見られず、5世紀中頃に比定できる履中紀から見られること、その職能が武力を有することと関連して、大和朝廷の関東、越中、越後等東国進出と密接に関連していると考えられる事等からして、5世紀中頃～後半にかけて勢力を得てきた比較的新しい氏族であり、その勢力の伸長は大和朝廷の東国進出と密接に関係して6世紀代に全盛期を迎え、6世紀終末にいったん衰退していった氏族であると考えられている。

このような物部氏の盛衰に対して、伊香郡内における上記古墳群を見ると、古保利古墳群は、最古式の第3号墳は4世紀代にさかのぼり、群内中程に位置する75号墳が5世紀前半代のものであって、他の前方後円墳についても、その墳形からして、75号墳に近い年代を与えることができる。従って、古保利古墳群は、4世紀代にその形成が始まり、5世紀前半代に盛期を迎える古墳

群といえる。一方、物部古墳群は、平地に立置すること、墳丘規模が大型化すること、周溝を有すると考えられるものが存在すること等からして、古保利古墳群より後出的で、5～6世紀代の築造になるものと推定される。このように見てくると、物部氏の成立と勢力の伸長過程に対して、平地に立地する物部古墳群が年代的に対応してくる。このように、伊香郡における首長系列の墳墓は地累状の丘陵尾根上に立地する古保利古墳群から平地に位置する物部古墳群へのその位置を変えて継続的に推移していることがうかがえる。この推移が物部氏の当地への進出と深く関連するであろうことは、当地が日本海地方へ通ずるルートの交通上の要所を占めることから容易に想像できよう。

さて、上記のように、物部氏と関連すると考えられる物部古墳群の形成に対応するかのよう、狭長な余呉川沿いの谷合い部に多くの群集墳が形成されはじめるのである。このことは、大和朝廷による東国への進出、特に、越中、越後への進出とは無関ではあるまい。すなわち、余呉川沿いはいわゆる北国街道として福井県武生市へ通ずる主要な交通路である。従って、大和朝廷によるこの地域の掌握は不可欠であったものと思われる。伊香郡より日本海地方へ通ずるもう一つのルートとしては敦賀へ通ずる塩津街道が存在するが、この街道沿いでは、前方後円墳1基、円墳3基から構成され、4世紀末から5世紀末にかけて築造された西浅井町塩津中丸山古墳群^⑭が存在するが、この首長系列の墳墓以外では、薬師古墳が知られるにすぎず、北国街道沿のように、群集墳の形成は顕著ではない。この差異は、大和朝廷の東国進出に伴い、伊香郡への進出、すなわち、北国街道を掌握することにより、街道沿い地域の共同体の分解を促進させた結果によるものではないかと推察されるのである。

以上のように、狭長な谷合い部であって、貧弱な生産基盤しか持たない北国街道沿いの地域における群集墳の発生、量的な増加を考えたのであるが、小なくとも、直接、間接の差はあれ、群集墳の発生が中央政府による支配、被支配体制の確立に伴う共同体の首長層の官僚化と共同体的紐帯のゆるみによって生じる共同体構成家族の成長にもとづくものであるとするなら、中央政府の力がより早くかつ強く及ぶ地域、すなわち、中央政府にとってより重要な地域により早い段階の群集墳が発生するであろうし、その量的な増加も促進されるものといえる。

以上、湖北地方において、群集墳の発生にいくつかの段階のあることを見てきた。そして、すでに5世紀末葉にさかのぼって発生していることを指摘した。また、貧弱な生産基盤しか持たない北国街道沿いの地域において、時期的にも、量的にも群集墳が盛行している事実を中央政府の東国進出を契機とするものであらうと推察してきた。鉛練古墳の位置付けについても、以上のような考察の過程で理解し得るものと考ええる。